

令和6年度 港南中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

【成果と課題】

○全国学力・学習状況調査結果

＜国語＞

成果:知識の定着を図るために週に1回漢字小テストを行っているが、漢字の問題では大阪府平均を2.5ポイント上回った。また、問題演習としてグラフや図を含んだ問題を解くことや、作文の練習を継続して行った結果、表現を工夫して物語の最後の場面を書き、工夫した表現の効果を説明する問題において大阪府平均を9.7ポイント上回った。引き続き入試対策として問題演習や知識の定着を図る反復練習、小テストを行いたい。

課題:大阪府平均には到達したが、全国平均には1.1ポイント下回った。特に話し合いの話題や発言を含んだ文章を踏まえて自分の考えを述べる記述式問題の得点率が低かったため、文章に対して自分の考えを持ち、文章化する力を身に付けさせたい。また、要約する問題の得点率が大阪府平均より3.9ポイント下回ったため、読解力の向上も含め、要約練習も行う必要がある。

＜数学＞

成果:集計結果は全体として大阪府と比較して3.0%、全国と比較して1.5%上回った。学習の観点においては知識・技能が大阪府と比較して2.1%、全国と比較して0.9%、思考・判断・表現においては大阪府と比較して4.6%、全国と比較して3.5%上回った。1年次から取り組んでいる数学スキルプリントで基礎・基本の問題を定着させた成果かと思われる。今後も継続させたい。

課題:数学科において、図形の観点において大阪府と比較して－1.3%、全国と比較して－1.1%であった。この結果より、本校の生徒は図形の解答において苦手意識がみられる。3年次の図形の範囲はこれからの実施になるので重点的に指導する必要がある。

○3年チャレンジテスト

＜国語＞

成果:昨年度から引き続き新聞記事を用いた問題演習を行っているが、今回のチャレンジテストでは新聞記事に関する全ての問題において2ポイントから4ポイント大阪府平均を上回った。古文の問題ではチャレンジテスト対策として行った歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに書き改める問題が出題されたが、7.7ポイント大阪府平均を上回った。また、ほとんどの選択問題に対しての無回答率が0%だったことから、諦めずに問題に取り組む姿勢が感じられた。

課題:特に古文の問題において得点率が低かった。主語を補ったり、文章の内容を把握して解く問題に課題が見られるので、問題演習を繰り返し行い、古文を読むことへの苦手意識を減少させたい。また、漢字の問題では漢字の読みを答える問題は概ね大阪府平均と同等かそれ以上であったが、書く問題については3問中2問大阪府平均を下回った。現在小テストを行っているが引き続き小テストや課題を与え、知識の定着を図りたい。

＜社会＞

成果:問題形式別平均点において、短答式では大阪府平均点を0.5点上回った。夏休みの宿題として重要語句を3回ずつ書かせる取り組みによって効果が表れたと思われる。また、記述式では大阪府平均点をわずかに0.3点下回った。記述式においては条件に従って、自分のことばでまとめる力がついてきていると思われる。

課題:大阪府平均点を2.6点下回った。学習指導要領の領域別平均点において、大阪府平均点を「地理的分野」が1.4点、「歴史的分野」が1.3点それぞれ下回る結果となった。特に、「歴史的分野」については、近現代史の分野において、大阪府平均点を大きく下回ったので、高校入試までに復習に努めたい。

＜数学＞

成果:平均点は大阪府と比較して、1.9ポイント上回った。学習の観点においては知識・技能が0.9ポイント、思考・判断・表現において1.0ポイント上回った。昨年度から取り組んでいる数学スキルプリントで基礎・基本の問題を定着させた成果かと思われる。また、今年度は習熟度別授業で個に応じた指導が行うことができた。今後も継続させたい。

課題:数学科において、領域別の観点で比較すると、図形の範囲が大阪府の平均を下回った。1年生のころから図形の範囲は苦手意識がみられる。3年生の相似の範囲では既習事項を振り返りながら問題演習を通して、思考力・判断力・表現力を育成したい。また、効果的な教材作成や発問を実施していく必要がある。

＜理科＞

成果:今年度、力を取り入れた記述式形式では、大阪府の得点率と同水準まで近づいた。今年度から積極的に取り組んでいる班活動の成果と考える。会話形式の出題に関しては、必要な箇所を読み取り、要約する力が身についてきた。定期テスト等で、チャレンジテストと似た形式で出題した成果と考える。昨年度と比較して、第4区分の生徒数が減少した。

課題:領域別の観点で比較すると、特に「粒子」の範囲で課題を感じた。評価の観点では、「知識・技能」の部分で大きく下回った。3学期の時間に問題演習を通して、1年生の範囲から基本的な部分を育成したい。来年度は習熟度別授業等で個に応じた指導を積極的に行いたい。

＜英語＞

成果:1学期から、分割授業や夏休みの宿題として、過去8年間チャレンジの問題に取り組んだ。問題形式に慣れたこともあり、無答率は選択問題ではほぼゼロで、府平均と比べても低く、問題に取り組み、解答しようとする前向きな姿勢につながった。

課題:筆記問題では府平均よりは低い、無答率が増え、また、得点率も府平均より低いことから、書く力を今後、つけていく必要がある。

令和6年度 港南中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

【成果と課題】

○2年チャレンジテスト

＜国語＞

成果:過去問5年分をしました。3年分は冬休みの宿題、2年分は冬休みに入る直前に授業で取り組みました。特に授業では、活用問題を一緒に解いたり、古文の解説をおこなったりしました。直前に確認することで成果としてあらわれたと思います。

課題:漢字の読みなど、知識の問題が課題。春休みなどの長期休みで家庭学習をするように助言する。

＜社会＞

思考、判断、表現の設問については大阪府の平均より高い点数を残すことができました。⇒授業の内容をまとめる、資料の読み取りの効果か？

地理においては各都道府県の農業産出額の内訳の特徴や資料の読み取りなどで大阪府より正答率が低くなってしまっていた。

歴史においても基本的内容の設問で正答率が低くなってしまっていた。⇒地理、歴史ともに基本的な知識の定着が薄かった。

授業で学習した内容の復習や家庭学習が不十分である。知識の定着をどのように高めていくかが課題である。

＜数学＞

「数と式」・「関数」・「図形」の3つの領域において、「数と式」の領域において大阪府平均を上回り、「関数」・「図形」の領域で大阪府平均を下回った。

「数と式」の領域の問題では、大阪府の平均をおおむね上回っており、特に計算問題や公式を用いた基礎的な知識を問うような問題は出来ていた。

しかし「関数」の領域において、一次関数の変化の割合の意味の理解や一次関数のグラフの特徴について、表と関連付けて理解するなど、関数を表、式、グラフに関連して理解できないので今後の授業で工夫が必要だと感じた。また、式の意味を読み取り活用することができる問題が弱く、文章読解の力を育てるような問題を多く扱い今後の改善に活かしたい。

＜理科＞

全体:大阪府平均に対して、4.7ポイント下回り、中央値も4.0ポイントと大きく下回った。度数分布を確認する限りでは、上位層の割合が顕著に低く、下位層にも山があり、全体的に下位に山が寄った状態となっている。それぞれの生徒の実情に応じた学習展開が必要であることがうかがえる。

分野:単元別に見ると、全体的に大阪府平均を下回っているが、特に【生物】分野において、全12問中9問で府平均を下回っており、中には府平均よりも27.8ポイントも下回っている問いがある。平均を下回っている問いの多くは、基礎・基本を問うものが多いため、改めて重点的に基礎・基本の定着を徹底する必要がある。また、生徒たちの学習方法が『単語を一時的に覚える』形態に偏りが見られるため、定着に至っていない可能性もある。学習方法の見直しと、復習を徹底して行う。

解答形式:無解答率が、ほとんどの問いで府平均を下回っており、きちんと埋めようとする前向きな姿勢が見られる。しかしそれは、裏を返せば知識力・理解力が単純に劣っていることにもつながる。こういった点からも、復習の必要性、学習方法の見直し、学習の継続力を養うことが急がれる。

＜英語＞

成果:大阪府の平均点を上回ることができ、また、学習指導要領の領域ごとの得点率も超えることができた。普段の授業から、それぞれの領域を意識した授業を行っていた成果が出たと考えている。また、「書くこと」においても大阪府より点を取れていることが分かった。今後も自分の考えや思いを英語で書くトレーニングを続けていきたい。

課題:領域ごとに分析したところ、「読むこと」においての得点率が他と比べて伸びていなかった。文章に対する質問に答える問いで点を取れていないことが分かった。普段の授業から長文に対しての質問を英語で答えることを繰り返し練習することで、学年の苦手としている分野の対策をしていきたい。

令和6年度 港南中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

【成果と課題】

○1年チャレンジテスト

＜国語＞

成果：大問二～四における選択問題での無回答率は3.3割であり、すべての間で大阪府の平均無回答率を下回っている。「書く」問に関しては、すべてにおいて無回答率が大阪府の平均点を下回っている。第二学年での目標は、“書くこと”を積極的に取り組んでいくことであるため、普段から文章を書く習慣を身につけさせ、無回答率を減らし、正答率を上げられるように努める。

課題：大問一の漢字問題において、「漢字を正しく読む」では、『結束』という漢字の正答率が大幅に低くなっており、漢字の音読み・訓読みを正しく理解できていないのではないかと考える。また、「漢字を正しく書く」では、無回答率・不正解率が共に高くなっている。第一学年での取り組みとして、三学期からは毎週1回の漢字テストを実施してきたが、漢字の定着をはかるために次年でも継続して取り組んでいき、「漢字を正しく読む」の正答率100%を目指したい。

大問五では、古文の問題の無回答率がたいへん高くなっている。「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読む」という問題では、無回答率が20.4%正答率が28.9%と大阪府と比較すると12%も正答率が低くなっている。第一学年では、「竹取物語」が古文の取り組み作品であり、古文の基礎となる初めの作品だったため、基礎知識は丁寧におこなったが、基礎の定着ができていなかったことが分かった。また、“古文に触れる”という目的に偏ってしまっただけで、“解く”“読む”ということに慣れていなかったと考える。そのため第二学年では、古文に触れる機会を増やし、基礎の定着をおこなっていく。

＜社会＞

成果：校内正答率において、「地理」では、アジア州の自然や居住環境についての資料の読み取りについては、市の平均を上回ることができた。「歴史」では歴史区分、弥生時代の暮らし、白村江の戦い、仮名文字については、市の平均を上回ることができた。

課題：全体を通して、校内平均正答率が大阪市平均正答率を5ポイント下回った。正答率分布において、40%～50%の生徒が全市と比較すると多かった。その層の生徒たちをどのように引き上げることができるかが今後の課題である。今後の対策として、授業で復習もふくめ、まずは、基礎・基本の確認を徹底していきたい。また、授業内で資料の読み取りの時間をこれまで以上に確保していきたい。

＜数学＞

成果：12月に入ってから、授業内での過去問の取り組みをし、冬季休業中の課題としては、R1～R5分の5年分を冊子とノートにそれぞれ2周解かせた。教科のクラスルームには、各年度の解説を作り、いつでも見ながら学習できる環境を提供した。その甲斐もあってか、府平均と比べ+0.6Pという結果になり、特に標準偏差に関しては2.0P少ない(データのばらつきが少ない)結果が出たので、全体が意識的に教科に対しての取り組みを行えたことによるものだったと判断できる。

課題：府平均に対してはプラスで終わったのは良い結果だったと言えるが、観点別で見ると、思考・判断・表現の部分がマイナスであったり、記述式の部分もマイナスであったので、知識・技能が定着している反面、その辺りの応用領域や説明での解答にまだまだ課題があると言える。普段の授業から、説明する過程も意識させて学習に取り組ませていきたい。

＜理科＞

すべての分野で下回っており、学習の不足が顕著である。知識・技能の分野で10ポイント近く差があり、宿題やテストの取り組み方に工夫が必要である。

＜英語＞

成果：対府比5.5ポイント上回ることができた。大きな要因として生徒が日々の授業の中で英語をよく使っていることが挙げられる。英語が苦手な生徒でもフレーズとしてパターン化することで、生徒が「できる」と感じることであったと思う。

課題：大きな課題は大きく分けて2つある。1つは家庭学習である。的確なタイミング、内容で生徒に課題を出すことが今後も求められる。2つ目は学力の2極化である。授業の中で置いて行かれる生徒が出ないように、日々グループワークやペアワークを取り入れて生徒同士が教えあえる状況を作ることが大切である。